國學院大學学術情報リポジトリ

〔学生懸賞論文発表〕選評

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: [國學院雑誌編集委員会] メールアドレス: 所属:
URL	https://k-rain.repo.nii.ac.jp/records/297

選評

髙倉明樹子（文学研究科博士課程前期一年）

朝顔の花手折る薫―『源氏物語』「宿木」巻「今朝のまの」の独詠歌を視点として―

髙倉明樹子論文は、『源氏物語』「宿木」巻において、薫が中の君を二条院に訪ねる際に、持って行く朝顔の花を自ら手折りつつ詠んだ「今朝のまの色にやめでんおく露の消えぬにかかる花と見る見る」という独詠歌について、従来の解釈を分析した上で、それまでの説とは異なる、より薫の心中に即した新たな読みを示したところに特長がある。

論点である独詠歌の意は、〔今朝のつかの間の（朝顔の美しい）色をめでようか。おく露が消えない（わずかな間にその命が）かかっている花と知りながら〕となるが、この歌についての古注釈以来の解釈は、〔花におく露は短命の象徴とされるが、その露よりも更にはかないのが朝顔の開花の時間である〕という方向である。そして、その朝顔の花のはかなさに〔亡き大君の追慕〕と、当該歌に続けてつぶやいた「はかな」と併せて〔世の無常〕を思う薫の心中描写と受け取られてきた。さらには、独詠後に「女郎花をば見過ぎてぞ出でたまひぬる」とあるのは、〔女を象徴する女郎花を「見過ぎて」とあるのは、薫が好色に関心がないことを示す〕というのが従来の理解である。

それに対して、髙倉論文は、①〔「枯れゆくやうにて」命を落とした大君を、いま開花したばかりの朝顔に追慕しているとは言い切れないこと〕、②〔この後に中の君を訪れた薫は、中の君との贈答歌において、彼女を朝顔に喩えて恋情を訴えていること〕、③〔朝顔には「無常」と「好色」の両義性が研究史の上で指摘されていること〕などから、薫には〔朝顔＝中の君〕という一貫した意識があったことを詳細に論証する。その論証結果に立てば、独詠歌にかかわり〔朝顔〕に〔無常〕の意味のみを当てはめ、〔薫の人物像〕や〔大君への追慕〕のみが強調されるのは充分な読みとは言えないことになる。

以上のことから、薫は、朝顔の花を手折りながら、その朝顔に喩えられた中の君を「我がものとする」という思いを込めて「今朝のまの……」の独詠歌を詠んだのである。「女郎花をば見過ぎてぞ出でたまひぬる」は、朝顔（中の君）の他には関心がないからであって、独詠歌は〔中の君への恋情を詠んだ歌〕であること、しかも、その薫の思いは、その場で完結することな

く、中の君を訪れて贈答した「よそへてぞ……」の薫の贈歌にいたるまで連続性を帯びていることをも論じている。

以上のように、髙倉論文は、従来の説明では充分には理解しきれていない論点について、新たな解釈を意欲的かつ実証的に論じたものであり評価できる。

平成二十九年度　國學院雑誌学生懸賞論文募集

一、応募資格：第一部門（本学文学部・神道文化学部生・別科在籍者）
　　第二部門（大学院文学研究科・専攻科在籍者）
一、枚　数：四〇〇字詰四〇枚～五〇枚以内
一、テーマ：題目は問わない。
　　但し、未発表学術論文に限る
　　（卒業論文も可。ただし規定の枚数を収めること。）
一、締　切　日：平成三十年三月末日（当日消印有効）
一、入　選：賞状ならびに副賞（五万円）
　　佳　作：賞状ならびに副賞（三万円）
一、発　表：入選論文およびすぐれた佳作論文は本誌に掲載予定
一、選　考：國學院雑誌編集委員会
一、投　稿　先：國學院大學総合企画部広報課

詳しくは本誌表紙裏面を参照